特集

子供時代のアメリカ作品を読み直す

——子供時代の友から生涯の友へ

広島大学大学院教授 **新田玲子**

はじめに

子供の頃、年末年始、クリスマスプレゼントやお年玉に代えて本をプレゼントされた経験はないでしょうか。また、この時期、子供たちに本をプレゼントしようと考えられている方も多いのではないでしょうか。

こうした場合にふさわしい少年少女向けの本の中には、実は大人の読みに耐えうるものが少なくありません。特に一流の文学作家によるものは、若年の読者を意識して書かれている場合にも、しばしば彼らには難しい内容がそれとなく埋め込まれており、大人になって全文を読み直して初めて、ああ、本当はこんな作品だったのかと、驚かされることも珍しくありません。

そこで今回は、筆者の子供時代の愛読書からアメリカ作品を三点選び、筆者がアメリカ文学を学ぶうちに気付くようになった作品の背景や内容について語ってみようと思います。

マーク・トウェイン『王子と乞食』

『王子と乞食』は、筆者が六歳の誕生日に両親からもらった、初めての本らしい本でした。ところどころに綺麗な挿絵が入った、箱入りで堅表紙の美しい本で、手に取るたびに誇らしく感じたものです。

お話はよくご存じのとおり、同年の同日に王子に生まれたエドワードと乞食に生まれたトムが、衣服を取り替えただけで、驚くほどそっくり入れ替わってしまうというものです。そして服を取り替えたことに気付いてもらえないまま、王子は乞食として王宮の外に放り出され、乞食は王子が病に罹り、妄想を抱くようになったと見なされます。この奇想天外な状況のもとで王子と乞食に課せられた冒険や、彼らの場違いな態度や言動が引き起こす笑いに、当時は、はらはらわくわくさせられました。

言い換えるなら、子供だった筆者にとってこの作品は、王子が乞食になったり、乞食が王子になったりする、途方もない冒険譚でしかありませんでした。そして王子や王宮の印象的な挿絵も手伝い、『シンデレラ』や『白雪姫』のような、ヨーロッパに伝わる昔話の類と受け止めていたように思います。

実際にはこの作品は、『トム・ソーヤーの冒険』や『ハックルベリー・フィンの冒険』などで知られるアメリカ作家、マーク・トウェインによって創作され、1881年にカナダで、翌1882年にアメリカで、公表されました。

トウェインは、1835年、アメリカのミズーリー州で生まれ、ミシシッピー川の水先案内人、南北戦争、ゴールドラッシュに沸く西部といった、いかにもアメリカ的な体験を経て、荒々しくもエネルギーに溢れる西部開拓時代のアメリカらしい大仰な笑いや機知に富んだ諧謔、皮肉に満ちた諷刺を作品に盛り込みました。また、黒人英語や話し言葉をそのまま文字に反映するという、当時としては画期的な手法で登場人物を生き生きと描き出しました。その結果、彼は後年の多くの作家から、アメリカ文学に初めて真にアメリカ的性格を持つ作品をもたらしたと評価されます。

それほどアメリカ的性格の強い作家であるにもかかわらず、16世紀の英国チューダー朝を舞台にした『王子と乞食』では、表だってアメリカ的なものは何もありません。実はここにこそ、この当時のトウェインが抱えていた事情が反映されているのです。

『王子と乞食』が書かれる数年前の1876年、トウェインは自身の子供時代を回顧し、ミシシッピー川という大きな自然を背景に、才気煥発な少年、トム・ソーヤーを主人公にした冒険譚、『トム・ソーヤーの冒険』を出版して、大当たりしました。これに気を良くした彼は、少年小説をもう一度書こうと、続編『ハックルベリー・フィンの冒険』にかかります。ところがこの作品は前作ほど簡単に仕上げることができませんでした。

その原因として考えられるのは、それぞれの作品の主人公、トムとハックの本質的な違いです。自由奔放に見えるトムですが、彼は普通の家庭に育ったわんぱく少年の域を出ません。ところが、父親が大酒飲みの乱暴者で、家庭の庇護や教育をほとんど受けずに育ったハックは、子供のうちから煙草を吸ったりする社会のはみ出し者です。もっとも、社会の底辺に暮らす者の苦労や哀しみを身をもって体験してきたハックは、トムにない、弱者に対する配慮や優しさを持ち合わせています。それ故、黒人奴隷ジムの苦境を聞けば、奴隷の逃亡を手助けすれば地獄に落ちるという白人社会の教えに反してでも、彼を助けずにはいられないのです。

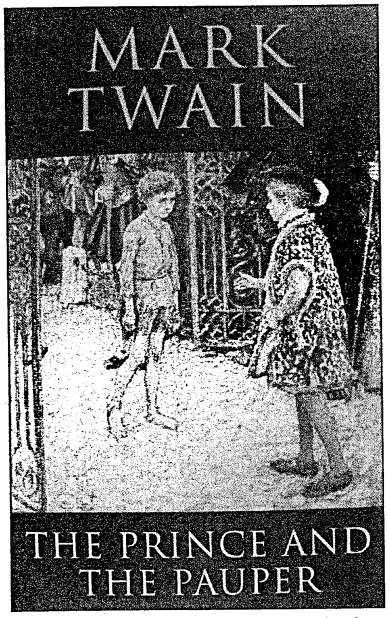
言い換えるなら、トムの英雄的行為が子供の冒険譚の範囲に留まるのに対し、ヒューマニスティックな価値観に基づいて自ら思考し、社会通念に反した行動さえ躊躇わないハックは、社会や人間の歪みに敏感で、誤った既成概念を鋭く批判します。このことが『ハックルベリー・フィンの冒険』を『トム・ソーヤーの冒険』を超えるアメリカ文学の傑作に、そしてハックを、ヨーロッパの社会的・宗教的規制から逃れ、自力で荒野を切り開いて新しい国を建国したアメリカ人の、国家理念を体現するアメリカンヒーローに仕上げてゆくのですが、こうした変化に一番驚かされたのは、トウェイン自身だったのではないでしょうか。というのも、彼は執筆途中で、想像力が枯渇したと言って筆を置いてしまうからです。

『ハックルベリー・フィンの冒険』のこの中断時期に書かれるのが『王子と乞食』で、この作品の構成には『ハックルベリー・フィンの冒険』との共通点が目立ちます。たとえば、ハックとジムは当時の社会通念に反し、肌の色や社会的立場の違いを超えた交流をします。ここには、人の本質は肌の色や社会的立場といった外見に左右されるものではないとする見解が窺えますが、こうした思考が、王子エドワードと乞食トムの身分を決定するのが服だけで、中身はまったく等しいという設定を可能にしていま

『王子と乞食』村岡花子訳、岩波文庫、1934年。
『ハックルベリー・フィンの冒険　下』斉藤健一訳、講談社、1996年。

す。同様に、人を肌の色で差別し続けるアメリカ白人社会の偏見は、王子と乞食の見かけに翻弄される人々の、愚かな固定観念と重なります。

さらに、ミシシッピー川をジムと筏で下りながら、ハックは次々と奇異な出来事に遭遇し、その体験を通して彼の内面は成長してゆくのですが、『王子と乞食』も同様の、冒険を通じての成長物語になっています。すなわち、王子エドワードと乞食トムが相互に入れ替わることで、それぞれにとって当たり前の環境を新たな目で見直す冒険が始まります。特に王子エドワードが目撃する、16 世紀半ば、イギリスのチューダー朝におけるヘンリー八世の晩年は、貴族でさえ簡単に首を切られ、過酷な法がまかり通り、いい加減な裁きや残酷な刑罰が跋扈し、金のためなら親兄弟でも裏切る身勝手さや暴力が横行していました。王子エドワードはそうした現実に晒され、新しい経験を積むなかで賢明な君主の素養を培い、「エドワード六世の治世は、残酷な当時の世にあって、めずらしく仁政のおこなわれたときであった」(299) というハッピーエンディングに至るのです。



王子エドワードは社会や人間の醜さや愚かさを露呈する出来事に次々と遭遇しますが、舞台が遠い昔であるため、「今は昔の物語」として片付けることができます。また作品の重点は王子の側に置かれ、誤った社会や悪人を人間的な見地から批判し、人々を幸福にするために何が必要かが示されるため、作品が少年物語の枠組みからはみ出すことはありません。従って、この作品が成功したとき、トウェインは彼本来の辛辣な社会・人間批判を盛り込んでも、なお少年物語が書けるという自信を得たに違いありません。

というのも、トウェインが再び『ハックルベリー・フィンの冒険』に取りかかったとき、それまで『トム・ソーヤーの冒険』の雰囲気を引き継いでいたハックとジムの心楽しい筏旅に、『トム・ソーヤーの冒険』にはない、社会や人間の醜さを赤裸々に暴く出来事が次々ともたらされるからです。たとえば、ハックとジムの筏には人の善良さに平気でつけ込む強欲な詐欺師たちが飛び込んでき、ふたりは散々に振り回されます。そうした詐欺師たちの言動は、人間のいい加減さ、身勝手さを如実に見せつけます。しかも詐欺師たちの悪行がばれると、人々は彼らにタールと羽を塗りたくって罰します。ハックはその場面を目撃し、「なんてかわいそうなことをするんだろう。もうあのさぎ師たちを憎む気にはなれない。おそろしい光景だった。人間ってときどき、同じ人間にとてつもなくひどいことをやるもんだ」(下 191) と慨嘆するのですが、彼の言葉は、人は理由があれば悪人の非道以上に残忍な行為を平気でやってのけるという、トウェインの冷ややかな人間観を明しています。その一方で、自分に害をなした詐欺師たちにさえ同情を惜しまない、少年らしい優しさを見せるハックによって、トウェインは

少年にはかくあってもらいたいと望む姿を示し、この作品を少年物語の枠組みに留めることに成功しています。

結局、『トム・ソーヤーの冒険』の続編を意図した作品が、ハックという人物の自由でヒューマニスティックな性格故に、『トム・ソーヤーの冒険』と本質的に異なるものにならざるをえなかったとき、トウェインは大成功をもたらした『トム・ソーヤーの冒険』の強い影響から自らを解き放つために、あえてアメリカ的な背景を捨てたと考えられます。そして、はるか昔のイギリスを舞台にした歴史物語の形式を用いることで、『トム・ソーヤーの冒険』とはまったく異なる、社会や人間に対する諷刺をふんだんに盛りこんだ新たな少年物語を試みたのでしょう。そしてこの成功により、中断していた『ハックルベリー・フィンの冒険』を再開する指針を得たのだと思えるのです。

もっとも、『王子と乞食』が『ハックルベリー・フィンの冒険』と同質の少年物語であり、後者を書き進めるための大きな足がかりになったとしても、英国を舞台にした『王子と乞食』とアメリカを舞台にした『ハックルベリー・フィンの冒険』には、決定的な違いがあります。すなわち、『王子と乞食』では物語の最後、王子は王宮に戻り、死去したヘンリー八世の跡を継いで王位に就きます。また乞食のトムにはクライスト病院の監督長という立派な職が一生涯保障され、国王直属者という尊称さえもたらされます。彼らはそれぞれに尊敬に値する社会的地位に収まるのですが、それはハックの願うところではありません。『ハックルベリー・フィンの冒険』の最後でハックは、「サリーおばさんがおいらを養子にして、ま人間になるよう教育しようとしてるからだ。そんなことされたらたまんない。あんな目には二度とあいたくないものな」(319) と、自分に押しつけられようとしている家庭的庇護をから逃げ出す計画を立てています。

作品の完成度という点からすれば、途中でトーンが変わる『ハックルベリー・フィンの冒険』よりも、全体の統一が取れた『王子と乞食』の方が優れていると言えるかもしれません。ですが結末における態度からも明らかなように、放蕩児ハックは極めてアメリカ的な、自由・自立・自主・自尊の精神を体現し、トウェインが生み出した人物のなかでももっともトウェインらしいヒーローになっているのです。

ナサニエル・ホーソーン「人面の大岩」

「人面の大岩」は中学一年生の夏休み、英語教諭だった担任の先生から注釈付きテキストを頂き、辞書を引きながら英語で読んだ最初の作品です。英語初心者向けに書き直されていましたが、人の顔のように見える大岩との対話を通して成長してゆくアーネストの、大自然と一体化した素朴な生き方にアメリカらしさを感じました。

アーネストが生まれた村には人の顔のように見える大岩があり、彼の村からはいつか、そのような顔をした偉人が生まれるという言い伝えがあります。アーネストはその偉人に是非会いたいと願い、毎日、大きな岩の顔を眺めては、それに向かって話しかけます。

アーネストは、何度か、大きな岩の顔をしていると言われる人物と出会います。たとえば、彼の子供時代には大金持ちになった商人の「金集め」氏が、青年期には軍隊で功績を挙げた「血と嵐」将軍が、壮年期には大統領候補になるような政治家の「岩面」氏が、大きな岩の顔をした偉大な人物だと絶賛されます。そのたびにアーネストは期待して会いに出かけ、毎回、失望させられるのです。

それでもいつかきっと大きな岩の顔をした人物に会えると信じ、その岩の顔を見上げ続けているうちに、アーネストは「深く考え、感じる日々を送り、人類の大いなる幸福のために尽くしたいという純粋な望みも抱き続け」(54) るようになり、人々に乞われて説教をするまでになります。しかも「かれの言葉はかれの思想と調和していたゆえに、力強く響いていた。またかれの思想はかれが生きた人生にぴったりと和合しているがゆえに、深い真実を秘めていた」(70) ので、彼の名は徐々に近隣に知られるようになります。

老年になったアーネストは、村出身の偉大な詩人の立派な詩を読み、この詩人こそが大きな岩の顔をした人物に違いないと期待します。ところがある日その詩人が、説教師として有名になったアーネストを訪ねてくると、彼は大きな岩の顔をしていません。詩人はその理由を、自分の言葉は神々しくとも、自分の人生はそれに匹敵するほど立派ではなかったからだと説明します。

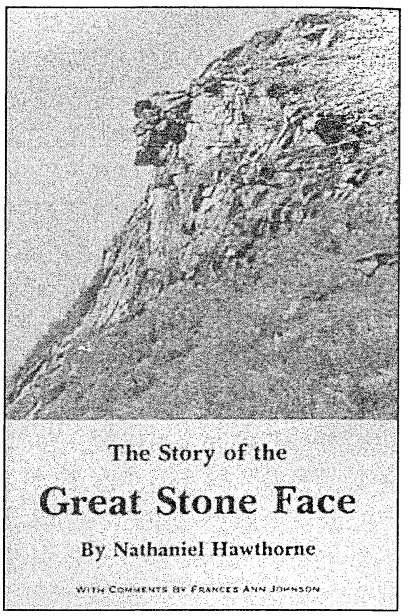
そののち詩人は、説教壇に立つアーネストが彼の生き方と重なる言葉によって輝くのを目撃し、アーネストこそ大きな岩の顔をした偉大な人物だと叫びます。そして聴衆もそれに賛同するのですが、ただひとり、アーネストだけは、そんなはずはないと、いつか大きな岩の顔をした人に会えることを夢見続けるのです。

この物語の作者、ナサニエル・ホーソーンは、1804 年にマサチューセッツ州に生まれ、19 世紀半ばの、「アメリカンルネサンス」と呼ばれる、文学的に成熟した作品が

「人面の大岩」竹村和子訳、『人面の大岩』35-71 頁、国書刊行会、1988 年。

アメリカで相次いで生まれる時期を代表する作家で、特に「寓意」を用いた道徳的作品を得意としました。

「寓意」は通常、ひとつのもので他のひとつの事柄を具体的に指し示します。たとえばこの作品では、登場人物の名前が寓意になっています。すなわち、「金集め」氏は貪欲な商人、「血と嵐」将軍は冷酷で勇ましいだけの軍人、「岩面」氏は人の心を蔑ろにする体裁だけの政治家で、そういう性質の人は真に優れた人間とは言えず、人間にとってもっとも大切なものは「アーネスト（真面目さ）」だという教訓になっています。



もっとも、「アーネスト（真面目さ）」で表わされる道徳的高潔さは抽象概念にすぎず、一見明白なように見えて、定義に曖昧さが残ります。それは「大きな岩の顔」も同様です。偉大な人物を体現している「大きな岩の顔」も寓意と呼べるでしょうが、「偉大な人間」とはどのような人なのか、実に漠然としています。しかもこの作品では、こうしたふたつの寓意が繋がりあうことで、人が理想とする生き方と自然との深い繋がりが示唆され、作品世界にさらなる奥行きをもたらしているのです。

たとえば、アーネストは彼の名前が示すとおり、素朴な農夫にふさわしい誠実で真っ直ぐな生き方をしています。しかし、「人々は人面の大岩がアーネストの教師であったこと、その顔に現れている情感がこの若者の心をおおらかにし、他の誰よりも広くて深い思いやりをもつようにさせていることを知らなかった」（47）と述べられているように、彼の内面を富ましてゆくのは、「大きな岩の顔」という大自然と深く関わる行為によるのです。このような、自然との語らいを何よりも重んじる姿勢には「超越主義」の影響が見逃せません。

超越主義は、アメリカに渡ったピューリタンたちの信仰が教義的になってゆくことに対抗し、19 世紀前半、アメリカ北東部のニューイングランドを中心に起きた宗教的、哲学的運動です。その中心となるのがラルフ・ウォルドー・エマーソンやヘンリー・デイヴィッド・ソローで、その基本精神は、聖書の勉強や宗教儀式に頼るのではなく、自然と直接向き合い、自身の内面を見つめ直すことで、大いなる神に直感的に通じることができるというものです。このことを実践するため、ソローがウォールデン湖畔の小屋で 2 年 2 ヶ月にわたる蟄居生活を送ったことは有名です。また、エマーソンはこの精神を実践する共同生活の場、ブルック農場を、ボストン郊外に開設しました。この共同生活は長続きしませんでしたが、一時期ホーソーンも参加し、その時の体験をもとに、1852 年、『ブライズデイルロマンス』が書かれます。

ところで、「人面の大岩」の発表された 1850 年以降、ホーソーンは短編作品を書くことをやめ、長編作品へと移行し、同年には代表作『緋文字』を、1851 年には『七破

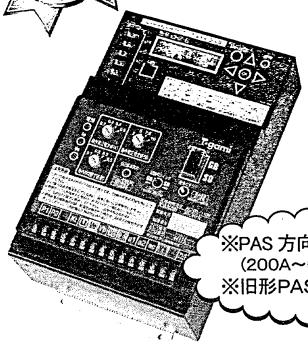
風の家』を、そしてその翌年に『ブライズデイルロマンス』をと、次々に長編作品を発表して作家としての地位を確立します。この時期から彼が長編作品のみを書くようになる大きな理由として、この時期までに彼の創作技法が確立し、寓意においても、その多義性をより一層明確にするため、より多くの要素を取り込める長い作品が望まれたからと考えられます。

従って、短編作品の最終段階で書かれた「人面の大岩」における寓意も、すでに長編作品の寓意に匹敵するような、極めて多義的なものになっています。そして、「大きな岩の顔」が示す「偉大な人物」も、「アーネスト（真面目さ）」が示す「日々の謹厳実直な道徳的生き方」も、その実態は、超越主義的な、大自然との交流を通してひとりひとりの内面に育まれる大いなる精神に結びつく、ごく曖昧にしか定義できないものです。しかし、真に偉大な人物の顔を表す「大きな岩の顔」の姿が、薄もやの向こうに輝くもののように捉えがたければこそ、その姿は人の心に一層強く訴えかける印象深いものになっているように思えます。

さらに、こうした自然の大岩が心にもたらす神々しさは、短編作品という性質上、単純化された筋によっても引き立てられています。というのも、後の『ブライズデイルロマンス』では、超越主義の理想を扱いながらも、それを崩壊させる人間の複雑で暗い内面にまで踏み込んでゆくホーソーンが、短編作品の「人面の大岩」では、自然を通して神的なものに通じる超越主義の理想状態を描くことに集中しているからです。その結果「人面の大岩」は、寓意が示唆する大自然の懐の豊かさや、その豊かさに感応した生き方をするアーネストの真っ直ぐな生き様が清々しい感銘を呼び起こす、実

高圧絶縁監視機能付
方向性SOG制御装置

受賞
JECA FAIR 2012 製品コンクール
経済産業大臣賞



※PAS 方向性と組合せ
(200A～600A)
※旧形PAS(KLT-M形)もOK

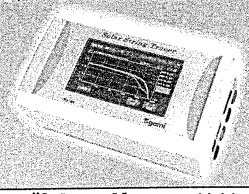
◆高圧受電設備の微地絡を検出・記憶
◆微地絡の発生状況を確認し、予防保全が可能

不意の停電を防止できます

PVドクター
太陽電池故障箇所特定装置

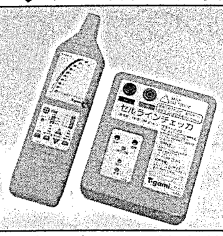
JECA FAIR 2013
製品コンクール
(一社)日本電設工業協会
会長賞
受賞

◆4ストリング分の測定結果を1画面に表示
相対比較により良否判定が簡単



ストリングトレーサ（I－V特性測定装置）

効率的に
故障箇所を
特定



◆故障箇所(断線箇所)の特定が可能
◆ストリングを構成するモジュールの
配置を特定

セルラインチェッカ（故障モジュール特定装置）

Togami
http://www.togami-elec.co.jp/

株式会社 戸上電機製作所
本社工場：〒840-0802 佐賀県佐賀市大財北町1-1
不明な点・お気づきの点などございましたら
お客様サービスセンター(本社：佐賀)
受付時間/営業日の8:30～17:00
0120-25-7867
(悩むな)ナ ヤ ム ナ

末永く……
末広がりの 88th

に気持ちの良い作品に仕上っているのです。

ジーン・ウェブスター『あしながおじさん』

『あしながおじさん』は、筆者がお年玉を使い、生まれて初めて自分で買ったアメリカ作品です。何を選ぼうか迷っていたとき、母が女の子なら誰もが一度は読むような本だからと、勧めてくれました。

孤児院で育ったジェルーシャ（ジューディー）・アボットは、機知に富んだ作文がきっかけで、福祉事業に興味を持つ大金持ちの関心を買い、大学に入れてもらえます。スミス氏と名乗るこの人物に対し、ジューディーは奨学金のお礼として月に一度手紙を書くよう義務付けられますが、スミス氏では個性がなさすぎると、氏の足が長かったという一瞬の印象をもとに、「あしながおじさん（ががんぼ）」と呼ぶようになります。本文はジューディーが氏に宛てたウィットに富む手紙から成り立っており、その手紙を通して読者は、ジューディーが少女から大人へと成長してゆく様を見守り、彼女が出会う級友の叔父、ジャーヴィス・ペンドルトンの人となりや、彼こそが「あしながおじさん」その人であったことを告げられます。

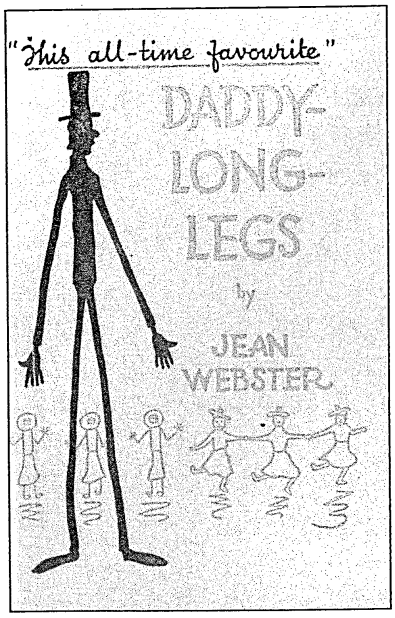
この作品をジーン・ウェブスターが出版したのは1912年のことで、第一次フェミニズム運動で活発化した女流作家による少女作品のひとつに分類されています。

ところで第一次フェミニズム運動とは、19世紀半ば、南北戦争で奴隷解放運動に携わった女性たちが、主として男性と平等の市民権を求めた運動を指します。この運動は1920年、女性参政権がアメリカで広く認められるようになると収束してゆきますが、この時期を代表する女流作家の第一人者が、1868年に『若草物語』を発表したルイーザ・メイ・オールコットです。他に、1913年の『愛少女ポリアンナ』で、どのような状況にも喜びを見出そうとする前向きで明るい少女、ポリアンナを生み出したエレナ・ポーターや、1886年の『小公子』の著者で、イギリス生まれのアメリカ作家、バーネット夫人などが有名です。

日本では、『あしながおじさん』も『若草物語』も『愛少女ポリアンナ』も『小公子』もすべてアニメ化され、子供たちに親しまれていますが、なかでも『あしながおじさん』は、「あしなが育英会」という遺児奨学制度を実践する機関の名称に使われるなど、実際に本を読んだことがない人にも馴染み深いのではないでしょうか。ところが本国アメリカでは、国民的ダンサーのフレッド・アステアがミュージカルで演じたりしているにもかかわらず、必ずしも国民に広く知れ渡っている少女物語とは言えないようです。実際、上述した四作の中では一番マイナーと言ってよいかもしれません。その一方で、アメリカにおける『若草物語』の人気は圧倒的で、それこそ、本を読んでいなくとも名前を知らない人はいないでしょう。

第一次フェミニズム運動を反映するように、『あしながおじさん』と『若草物語』のどちらにも独立心の強い女性主人公が登場します。『あしながおじさん』では身寄りのない少女ジューディーが奨学金の支援を受けて大学に行きますが、彼女はいつかそれを返却するだけでなく、授かった教育を活かして社会に貢献したいと考えています。

『あしながおじさん』村岡花子訳、角川文庫、1955年。



一方、南北戦争に従軍牧師として出征した父親の留守を預かるマーチ家四姉妹の物語、『若草物語』の原題は、父が娘たちを呼ぶために用いていた呼称、「小さな婦人たち（Little Women）」で、四姉妹が未熟な子供ではなく、幼くはあっても、立派な人格を持つ女性であることを明言しています。さらに、四人姉妹のうちでも中心的な役割を果たす次女ジョーは、オールコット家を経済的に支えるために作家になった著者同様、職業作家となって家計を担うことを目指しており、この作品が女性の自立を強く意識したものであることは明らかです。

このように、少女たちの成長と自立、女性の尊厳が前面で扱われている点で、両作品は共通しているのですが、『若草物語』の主人公の設定がアメリカ人には好ましく、受け入れやすい一方で、『あしながおじさん』の主人公にはアメリカ人が敬遠しがちな要素が含まれているように見えます。

たとえば、『若草物語』のマーチ家は、一家が交流する大金持ちの人々に比較すれば慎ましい暮らしぶりとはいえ、牧師の父を持ち、アメリカ合衆国の基礎を築いたニューイングランドにおける中流の、由緒正しい家柄です。このことは、オールコット自身が、ニューイングランドの著名な超越主義者で、超越主義の実験学校を建て、超越主義者クラブでエマーソンやソローらとも交流があったエイモス・ブロンソン・オールコットの娘だったことと無関係ではないでしょう。歴史の浅いアメリカでは、こうした歴史を感じさせる旧家には崇敬の念や憧れが抱かれやすいものです。しかもマーチ家が行う「慈善事業」も、彼らが心の拠り所とする聖書や『天路歴程』も、すべてキリスト教と関連付けられるようなもので、宗教国アメリカの国民には馴染み深く、受け入れやすいものと言えます。

これに対し、『あしながおじさん』に登場する慈善事業家、ジャーヴィス・ペンドルトンは、東部の伝統的家系に属する大金持ちで、極めて贅沢な暮らしをしているにもかかわらず、「（一家の者が）あの方のことを頭が少しおかしいのだ、とおっしゃいました。あの人は社会主義者なのです…あの人はヨットだとか、自動車だとか、ポロ遊び用の仔馬のような気のきいたものには、さっぱりお金を使わずに、いろいろな気狂いじみた改革事業にばかりお金を無駄使いするんですよ、とおっしゃいました」（152）と、一族の者に異端者扱いされるような、資本主義に対して反動的な側面を備えています。

この姿勢は、孤児として社会の底辺における生活を直に体験してきたジューディーによって、もっと生き生きと、力強く、表現されます。彼女はうわべだけの慈善行為を手厳しく揶揄しますし、日曜礼拝で「貧しい人がこの世にいるのは、私共を慈悲深

くさせようとの神さまの御心からであります」(23) という僧正の言葉を聞けば、それでは貧しい者は「有害な家畜みたいなものってことになります」(23) と憤慨を露わにします。ジューディーは慈善行為を、富める者が不公平な世界で果たさねばならない義務のようにさえ、受け止めています。そして、過激な革命思想に躊躇いを見せても、緩やかな社会主義思想を支持するのは正しいと考え、「親愛なるわが同士よ／万歳！私はフェービアンよ」(154) と高らかに宣言するのです。

もちろん、オールコットの作品にも社会改革思想や社会教育思想は随所に窺えるのですが、それがあくまでニューイングランド的、キリスト教的な善行と結びくのに対し、マーク・トウェインの姪の娘であったウェブスターのそれは、もう少し底辺の人々の痛みに寄り添う、リベラルな平等思想を表しています。もっとも 1884 年、英国を中心に起きたフェービアン社会主義は、本来、英国的良識に基づき、議会制民主主義のもとで少しずつ社会をより良い方向へ変えてゆこうとする、穏健な改良主義にすぎません。それが当時の知識人やリベラルな富裕層のあいだで広く支持されたことからわかるように、ロシアで見られたような、最底辺から沸き起こってくる革命的なものではなく、資本主義と妥協しつつ、緩やかにもたらされる変革なのです。とはいえ、宗教的右翼のティーパーティによって政治が大きく左右され、国民全員を保護する社会保障制度を推進させようとするオバマ大統領が苦戦を強いられているアメリカの現状を見れば、穏健であろうがなかろうが、アメリカでは社会主義的思考そのものが、日本人には想像もつかないほど大きな抵抗を呼ぶに違いないと推察できます。

これに対し、日本人は八百万の神の支配のもと、むしろ一神教の排他的宗教色を敬遠しがちです。それ故、キリスト教的な博愛主義やアメリカ固有の伝統と強く結びついた『若草物語』よりも、そうした既成概念をむしろ否定し、ひとりひとりの豊かな個性を平等に活かせる社会を目指そうとする『あしながおじさん』の方が、普遍的で馴染みやすいのかもしれません。

むすび

今回は、筆者にとって思い出深いアメリカ作品を取り上げ、子供の頃とは違った視点から論じてみました。子供の頃の理屈抜きの感動に比して、現在の読みは理知が勝ちすぎて見えるかもしれません。とはいえ、文学作品の真の面白さは、読み返しのなかで新たな発見を積み重ねてゆくところにあると思います。というのも、そうして年とともに変化してゆく読みにより、子供時代の友は生涯の友へと昇華されてゆくからです。

年末年始、いつもより時間にゆとりが持てるこの機会に、子供たちに本をプレゼントするだけでなく、子供たちとともに昔の愛読書を読み直してみてはいかがでしょうか。かつての自分が感じた感動を今の自分がどう捉えるか、かつての自分の反応と今の子供たちの反応はどこが等しく、どこが違っているのかと、思いを巡らせながら昔の愛読書と向かい合えば、きっと面白い体験ができるに相違ありません。